

W1-9 広範囲浸潤中下部胆管癌の浸潤辺縁部での
進展形式と予後に関する検討

浜松医科大学 第2外科¹, 浜松医科大学 病理部², 磐
田市立総合病院 外科³

福本 和彦¹, 坂口 孝宣¹, 森田 剛文¹,
大石 康介¹, 鈴木 淳司¹, 稲葉 圭介¹,
馬場 聡², 鈴木 昌八³, 今野 弘之¹

【背景】胆管癌の胆管断端陽性には壁内進展と表層進展
の2種類があるが、規約上両者の区別はない。【目的】
広範囲浸潤を呈した中下部胆管癌の浸潤辺縁部におけ
る進展様式、臨床病理学的因子と予後との関連を明ら
かにする。【対象と方法】腫瘍占拠部位が2領域以上に
及ぶ中下部胆管癌24例を対象とし、臨床病理学的因子
を検討した。胆管癌の浸潤辺縁部において胆管上皮を
置換するように浸潤したものを表層進展群(表層群)、
縦横筋層・漿膜下組織に浸潤したものを壁内進展群(壁
内群)に分けた。【結果】全24例の5年生存率は26.5%
であった。腫瘍の主たる占拠部位、分化度、深達度、
リンパ節転移の有無、根治度、pHM, pEM, 浸潤辺縁
部の進展様式で検討したところ、浸潤辺縁部の進展様
式のみが予後規定因子となった。5年生存率は表層群
(9例)60%、壁内群(15例)0%であり表層群で有意
に予後良好であった($p=0.014$)。2群間の比較検討で
は、腫瘍径は表層群18(9-62)mm、壁内群30(10-55)
mm、隣浸潤、十二指腸浸潤、リンパ節転移の有無で差
を認めなかった。神経周囲浸潤は表層群44%(4/9)、
壁内群93%(14/15)と壁内群で有意に高率であった。
術式は表層群でPD(PpPD)7例、HPD2例であり、壁
内群ではPD(PpPD)12例、HPD1例、その他2例で
あった。肝側胆管断端(pHM)陽性は表層群で3例、
壁内群で4例認め、平均生存期間はそれぞれ40月、14
月であり、表層群のpHM陽性の3例では局所再発を認
めていない。【考察・結語】広範囲に浸潤する中下部胆
管癌において浸潤辺縁部の進展形式は予後と関連があっ
た。進展形式に応じた適切な術式を選択する必要がある。